

歴文研修会

大古事記展と佐保路の 深掘り歴史探訪

(平成26年12月13日)

今年最後の歴文研修会は、晴れ、最高気温7度という真冬並みの寒さにもめげず22名の参加があり、佐保路の歴史探訪の一日となった。

9:30、川井代表の挨拶のあと、県立美術館の「大古事記展」へ。世話人の鈴木さんのお手配で、思いがけなく全員の無料招待券をゲット、幸先良し。嬉しい気分で入館する。

展示は考古学的な出土品や、大神神社・石上神社などの国宝級の神宝や文献資料が並び興味をそそる。さらには明治以来の有名画家の手になる人物画の数々が、古事記の世界のイメージを一段と盛り上げている。展示に引き込まれて時間は大幅にオーバー、次の目的地の称名寺へと急ぐ。

「称名寺」は興福寺の別院で文永2年(1265年)の創建、侘び茶の祖・村田珠光の寺として有名である。ゆかりの茶室「獨廬庵」は5月15日の珠光忌に開放され、茶席での接待がある。圧巻は「千体地蔵」。梶原景時永永の多聞城の城壁に使われていた石仏が、城跡に散乱していたものを100年後に観阿上人が集めて合祀したと伝えられる。整然と並べられた1900体もの石仏は、目鼻もはっきりしないものも多く、石仏の辿った数奇な運命を偲ばせる。

称名寺境内にて



歴史探訪は、時間切れのためここで切り上げ、午後の会場の佐保川地域ふれあい会館に移る。

13:10 快適な教室で午後の座学が始まる。まずは、川井秀夫さんの講義「仏の教え」。最近の日本人に「情」が乏しくなったと嘆く川井さんが、古来より日本人のバックボーンとなってきた「仏の教え」について語る。道元、鴨長明、良寛、二宮尊徳、芭蕉などの先哲の残した箴言を引きながら解説し、講師自身の自然観、人生論へと展開される。平易な話と呼吸の見事さに、思わず引き込まれるひと時となる。

岩本次郎先生の「息長氏あれこれ」。古事記、日本書紀、続日本紀から息長氏に関する事項を拾い出して説明される。第9代開化天皇から、神功皇后、継体天皇・敏達・舒明・天智・天武へと続く皇統の節目に、見え隠れする謎の豪族息長氏について理解を深める貴重な講義であった。

トリアは、法華寺界限の主、鈴木末一さんによる「法華寺の話」。

語りの始めは「恋とロマンの佐保路」。曰く、狭穂姫、磐之媛、横笛、光明子から大正時代の北見志保子と美女と恋の話。一転して話題は、光明皇后を写したと伝えられる法華寺十一面観音像について、印度ネール首相来訪の秘話。本堂の擬宝珠に残る「秀頼公御母寺」「奉行片桐且元」の刻文は初耳。光明皇后の悲田院や施薬院は社会福祉の原型、明治の昭憲皇太后から現在の皇室にも引き継がれることなど、話は尽きない。

圧巻は、法華寺町の旧家に伝わる古地図「法華寺村古図」。畳六畳はありそうな和紙の大絵図に、山河、田畑、道路、区画、地目、寺社が詳細に書き込まれていて、かたずを呑んで見入る。歴史の深掘り、これが今日一番の収穫。

最後に来年度の活動計画案が提出され、出席者から様々な意見やアドバイスを頂く。かくて、一年を締めくくる研修会『地元の歴史深掘り』は、今年も内容の濃い一日となった。

反省会では、13人が尽きぬ話と昼間の余韻に浸っていた。

(歴史文化クラブ 古川 祐司)